
ダゲンブンゴ。

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダゲンブongo。

【Nコード】
N6881Y

【作者名】
白紙描写

【あらすじ】
暇度を最大限に生かした：物語

飽きてしまったのは、ぼくの所為ではないから…。他人の所為だから。

「もう何もかも飽きてしまつて、遣ること無いな」

空気を吸って吐くことだけは、一人前に飽きないのだが…

それを、ハイソレ飽きたと投げ出し止めること出来るはずがない。弱虫毛虫な自分しかそこには居ないから。

…こんな体験をした…

一度やり初めて、手に入れた、スキルも飽きてしまえば、活用する機会も遠のき、得た物は衰える。

手に入れても時間で朽ちる。その時、諭された一言。

諦め投げ出し飽きる。壁が在れば乗り越えず、砕かず、遠回り。

人生なんて語っちゃいけないのか…遠巻きにいつて、退屈しのぎの茶番を開いて、楽しみ、のちにお開き。

生き甲斐を見つけてしまえば良い物の未練が邪魔をして、全身全霊を尽くせない。

「友達でも呼ぶか…」

敷かれた畳の上で飢えた蛙のようなぼくは、お友達を呼ぶことにした。

仰向けになり、大の字で盛大とスペースをとる僕は、頭上に存在し得る形態電話を手に取った。

プチ

ぼち

貧弱そうな効果音と高らかに、聞こえさえ渡るキー音。

履歴から『友達B』と見て取れる表記カーソルを移動させ、コール。

ピリリリ

ピリリリ

…

耳元に小型スピーカーが埋め込まれて要るであろう箇所にてると聞こえた。

数秒程か、あいつも暇を待て余しているのか、直ぐに相手の音声がかんこえた。

『はい、何だ。於川かどうした？今日も暇の同視か？』

於川とは、ヨリカワで僕の名前。親が携えた真名だ。其れ意外の名前は、あだ名。

同視とは、同士…つまり、彼も暇なのであろう。

「ああ、暇だ。取り敢えず来てくれ、」

ぷつ。

必要最低限のことはいったし、あれだけ言えば、言われるままに来てくれるだろう。

なんせ、あちら側も暇だとか言ってるし。

さて、此処から本題だな。

何して遊ぶかがこんにち重大な役目だ。下手すれば、相手も三十分帰ってしまい…たださえ、あちら側から来ていらっしやるのに、迷惑ではないか。

迷惑と言う表現は、そのくらいの意味合いに値するって事を意味していて、表現技法が可笑しい訳ではない。

「あ、そうだ。部屋でも綺麗にするか、」

何も無い部屋は、只でさえ、何もないのに…只でさえ、物々しくなり余地がないのに掃除するのも、この世の末だな。

哀れとでも言いたいのか、掃除機だけは部屋の隅に、整理されている。

今週何度目の掃除だろう？

覚えて居るはずもない。歯を磨くのだって、食べ物をお口にした直後から三分以内に磨いているし…其れ同等に、人一倍数が多い。

覚えて居るはずがない。

別に綺麗好きとか、潔癖症との類に分類される訳でもなく、ただ単に暇だからとか、遣ることがないから…の理由から動機は来ている。まあ。僕のレベルに成ると、同じ様なものだけど、ね。

逆に例えれば、これが今の僕のあり方で。すぐ飽きてしまう症の僕からしてみれば凄く立派、世間体からも無害なよろしいこと…。

けど、虚しさが後のせでかさばり積もっていく、心のどこかで…。

「今日は面白そうな番組遣っているかな〜」

近代化の進むこの国で、ハイクオリティー過ぎる番組の連鎖で見る人を混沌へと引きずる込むテレビの中の人達は、今日も元気に何かを遣っているのだろう、と。

基本、テレビに映る番組表しか見ない僕だが、今日はテレビの音を聞きながら、掃除をすか。

興味本意とはまた別の好奇心を乗せ、一階のリビングまで降りて観る。

「リモコン。リモコン」

友達だって、汗だくなせつかち野郎ではないため、気長にゆったりと歩いてくるのだらうな…。

廊下、誰もいなく。何も無い、玄関ドアが見えるだけ…。

は、リモコン。

於川は、ヨリカワは、瞬く間にリモコンを探せない。

「何処に置いたんだ。親め。」

基本。親とは、顔を殆ど合わさない。

両親は今。仕事中。

探し巡る…

お、いい感じ。

「見つけたぞ。」

地デジ対応中だから、複雑なボタンがごろりだ。

どれが電源か。…なんて、誰でもわかりはするものの最低限の操作
しかできない。

これが現代社会を居るおれの最大限だ。

ひとまず、テレビに電源をつける。

何かに没頭するに当たって、命を削るような感覚に捕らわれてしま
い。それが思考、容姿まで行き渡るから恐ろしいことだ。

その所為在って今の僕は、とても燃え尽き灰のような感じ。

明日地球が滅びようとも僕はそのまま。維持し続ける。明後日に僕
が死のうとも、誰も気づきはしないし、悲しみもしない。
器用にそう生きてきた。

テレビに映る人達は、威力が在って、淡水魚の様に活発。

所詮なんて言葉が何処でも使えように、所詮、人間なんて。高が
知れてて、所詮、僕だって何だって出来るわけではない。

リモコンでテレビを点けるだけの得しかできなくて、今から掃除を
することしか、有すれない。

「音量を三桁まで上げるとしよう。」

このテレビ、音がかすんでよく聞こえない、から。ボリュームを上
げる。

何、隣近所迷惑が及ぶ筈がない。だって、防音機能に特化した。特
別なコンクリートを壁にまたいで被さっている。その所為余って、

何もしなければ、何も聞こえない。自分の心臓の音しか聞こえないのかも知れない。

「諦めて死のうか？」

まだ早い。やり残してきた物は、何一つだって無いが今はまだ…

大音量のリビングから少し離れた自分の部屋まで、歩く。

音は段々だが遠ざかるような感じ。他愛も無い討論会の音も高らかに僕聞き取る。

大丈夫だ。と自分に言い聞かせ、今日を乗り切る覚悟。

僕はいつもの部屋で、掃除機をかけた。

スゴー

ズズ

図図と聞き取る僕の脳みそ。

今日の滑り出しは最高潮。波に乗った気分だ。ノリノリな於川は、住居の騒音迷惑を自負して、掃除機の吸い込み音を下げる。

何か、形に名るものでも残して、この世を去りたい。

その願いだけでも贅沢。

図図ガッ

どうやら、何か、掃除機のノズルに誤挿入した様だ。詰まって何も吸えやしない。

常識人。死ねと言えば死ねる人。

それが僕の脳内履き違え文書に刻まれた一説。ふと、思い出しただけだ。意味はない。

於川は、詰まって居る何かを窺める。

意味の無い文役を整えるより、よっぽど増な物がカカズっている事に気がつく。

処でだ。友達について話して観よう。

属に言う友達とは、ちゃんとした名前があり、友達という名前ではない。ちゃんとした個性だって備え付けである、薄型の電化製品に目がない。

あ、そうだな、彼の名前を薄型と呼ぼう。名前なんて長ったらしいから、あだ名で呼ぶが一番だ。呼ばれるのは除外だけだ。

「ああ、これが引つかかっていたのか…」

於川は、詰まっているブツを取り出した。掃除機にとって、そのブツは異物や汚物。僕は優しくない生き物だが生き物ではない物には優しいのだ。

サイコロのような模様をしたトランプ質のカードの束が右手にあった。

恐らく、カードの束は輪ゴムで束ねていたらしく、今は溶けてカードに蔓延る始末。

老体なゴムは、カピカピに干からびていて、いかに歪か解る。独特香りも楽しめる。

「懐かしいな。これ、よくあるあれだよな」

暗黙の了解を経て、遮断される語彙。

「昔よくハヤったなー。」

昔は、そう昔は、ガキの頃と古臭く言うか、子供の頃と懐かしんで言うべきなのか…

要するに、カードゲームだ。無邪気で邪気の無い無垢な人格の時によくやった暇つぶし、今は、遠い昔の別人な俺が使っていた玩具。

「ユニークなものだな」

ペラペラと、溶け出し付着し痕跡を残すゴムを無造作に取っ払い。中身を拝見しての感想。

著しく興味なさすぎる回答論。健在する僕とは違って、子供なら観るだけでゾクゾクしただろうに…。何だか、損した気分になる。

多分、昔っから俺は短才でただの子供だったのだろう。カードゲームを仕出かす僕、僕の友達もつられて遣っていた…いやはや、違いな僕が、自分自身がつられて影響を受けた。

流され安いのではない。流れを変える気力や発想力が皆無だったのだろう。

おっと、着目する場所が間違っている。要するに即ち、昔はちゃんと楽しんでたってことだけ、解れば充分だよ。

カードの束を机の上に置き、掃除を続けるべく、自身に促しを駆ける。

「この行事もやれば大概は、楽しめる物だ。」

遣りだしは滑らか、その遣りだしに乗るのが困難。後は自然と飽きてしまう。

掃除だって、ずっと出来るわけではない。持続する許容も限度があり、それは意識しなくとも抑止力が架かり、抑制される。

永遠に、永久に、物事を繰り返し反復出来るわけではない。出来たとしても、僕には当てはまらない。もし、そのような人間が居たのなら、それは人類が生み出した最終兵器だ。

崇められるのは、人ではない。物でもない。者ですらない。崇め称えられる代物は、仮想世界の民。

ズズ -

吸引を繰り返し反復するのは、掃除機の方で、有機物じゃ無い方の無機質とも言えよう。

溶かせば、要領が解る。素材だって、明らか…生き物じゃない方は、苦しみを知らない。

「掃除機、お前は、幸せそうが良いよな。寿命もまだまだ、残量いっぱいいっぱいって感じで…。…なんと、云えばいいのか…愛もなくて、良いよな。」

寿命が尽きれば、粗大ゴミ。人は、物には『便利』の二文字しか象徴しない。

だって、人工に、楽をしたいから作った。それだけの理由で在るのだから、名前すら、正式名称で呼んでくれない、掃除機はどの掃除機とも共通だから…

綺麗にするのなら、何でも、綺麗にしてくれるのなら、少しばかりの人間。少数の人達の心を綺麗にしてあげたい。

そして、少しばかり汚らしい、汚らしい世界を美しくしたい…

「馬鹿な考えだ。自分すら腐った人間の方に針は傾いていると言うのに…」

あだ名、『薄型』が来たら、まず始めに、掃除機で煩惱を吸い上げてやろう。その後、次から次へと…買い込む音楽観賞用形態機器をもう少し、丁寧にそして、貴重に扱うよう促そう。

そう、薄型が何に対しても薄く薄暗い様に…

ピリピリ

ピリ

電話だ。

的確正確には、携帯のスピーカーから着信音が発生しているだな。

今日初めての携帯電話の呼び出し。

何時もなら、メールすら来ないし、迷惑メールばかりだ。因みに、友達からの迷惑しか来ない。

ネット環境が整っていない。携帯なのでそんなもんだ。

「はい？なんだ？」

僕は、基本真面目キャラを象っている為、そのような口調をイメー
ジしてくれ。

於川は、苗字と勘違いされるほど、名前とは言え無い名前だ。親が
『方人二111』と書かれた紙屑を拾ったことから始まりらしい。

話がズレましたね。

於川は、手慣れた足さばきで畳に無規則に配置された携帯電話を親
指で斜めっているホツチキスを空挟みして、畳まれた針のような模
様のマークが表記されたボタンを押しながら、応えた。

『今。家の前』

プチ

対応無しに、状況だけ訊いて、横になったホツチキスを空挟みして、
畳まれた針のようなマークが表記されたボタンを押す。

そして、玄関に向かう。於川。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6881y/>

ダゲンブゴ。

2011年11月22日04時09分発行